百花鳥圖畫

巻之貳

鷺し川やわとりて颯く沢枯枝

闌幽子

勢井草も高く宿多き野厂小

曼美次

二十一

川骨桔梗（かわらききやう）

花こんぜう付立葉二ぐん緑青いづれも付立茎の汁まうら(?)ゐ筆也

蒼鷺（あをさぎ）　鶺鴒

目の内白緑にうらごふん觜筋彩色ごふんにて出入地絆墨の具を(?)くわりとにをみる(?)ゐ五寸をけて毛出仕上に背中分かて筋さおいろうをおびせべし色合よくよく考べし凡物墨の具にて濃く肢地絆よりお濃色つくく(?)ゐゆるべし觜合まうど出のぎうとみくまのべし足白緑くさの汁出執し白くう肢でう(?)んく毛出ごふんにて

二十二

勢井草（せかさう）

一花白しごふんけずにて葉じみぐそいづれも付立葉二ぐん緑青付立まうらくまゐ茎の汁にて

野鴈（のがん）

目の内えを緑ごふん觜足墨の具墨くゐ頭より胸まで墨の具すくうて墨毛出被ゐふをべし背中黄土乃具墨くまするて肩を出白胴のゐれごし蔽くに合すうどにて柔らか肢白しでうんめうごふん毛出凡物墨くゐ毛出をみそ

二十三

澤瀉（おもだか）　慈姑（仝）　藉菇（仝）　燕尾草（又）

花ごふん中に淡ごふんにてつきとへ上に志をうをくべし葉小緑青にて付裏ハ白緑茎の汁にて隈茎白緑茎の汁にてくま

鳧（かも）　鴨（仝）

目の内朱とみつちごふん嘴墨の具にてくまを取ちやをけ頭墨の具上に淡墨をかりこもと小緑青をとくべし○白ごふんにて毛を下墨の具淡墨にてすみ墨にて席を付せる色にてうすく染めを入てくま背墨の具上にちやをけ風切墨にてえ墨にてかせん〳〵り淺ごふんにてかくろく羽白にてすこし股白ごふんにて雌は墨にてくとうちやをくべし股白くごふんにて毛を出し

二十四

石斛（せきこく）

花ごふんの具上ごふんにて花茎の汁にてつき茎黄葉緑青にて付る

鸕鷀（うのとり）　鶿（仝）　鳥鬼（仝）　水老鴉（又）

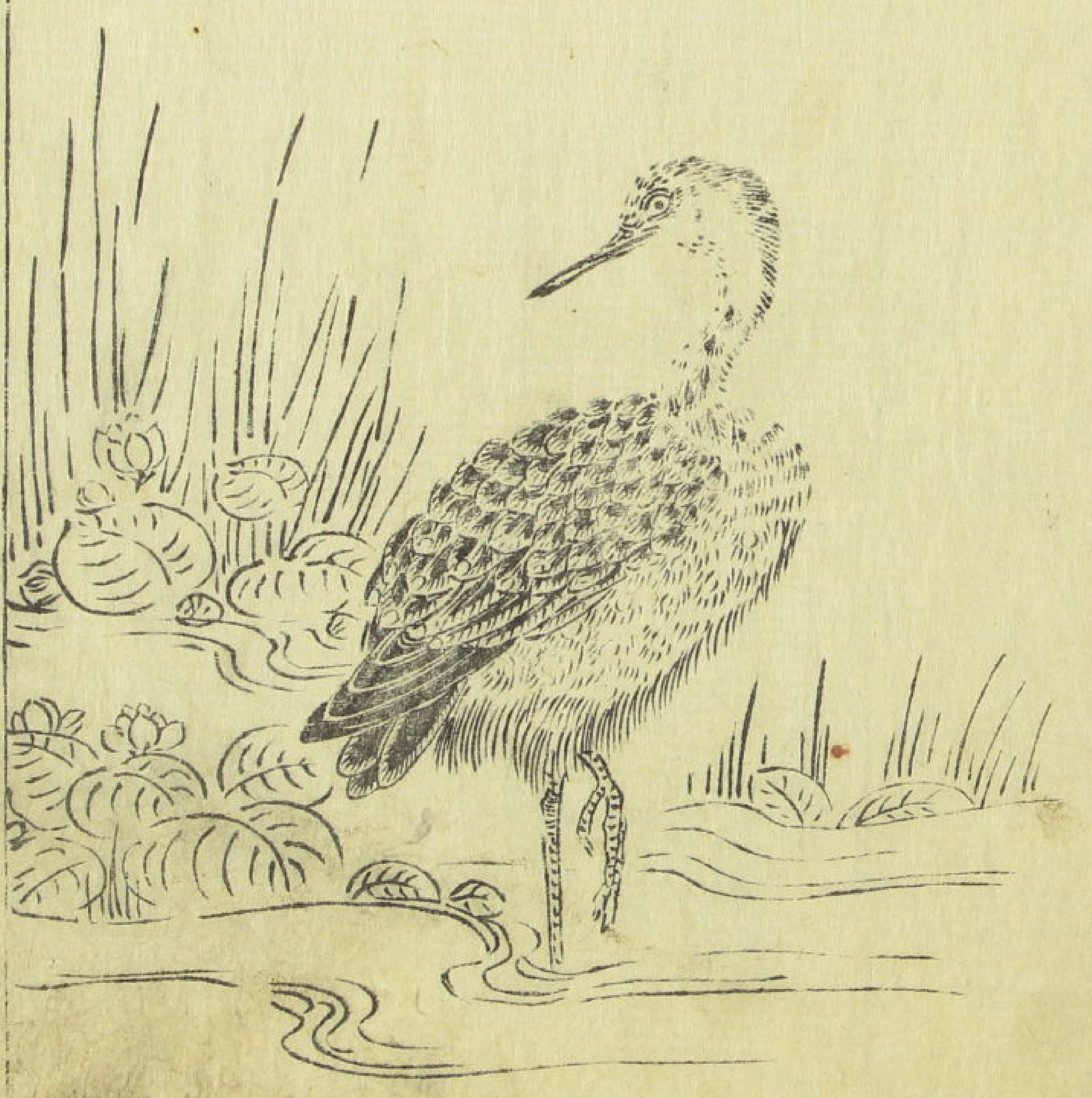
目の内朱どみつちごふん嘴足墨の具をとりて志起しすくま嘴口墨お黄にてかくべし頬より下わこふ白しごふん也翅乃下白しごふんにて頭首淡墨にてまかわく白ごふんにてわりごふんにて突へし背中より風切尾まで墨し淡墨にて庇より毛を志をくべし淡墨にてむべし○より下様まで淡墨にてかの小緑青を引べし

[illegible]

曼[illegible]

小蓮起水小鳥飛来り隠鷸

番花



二十五

小蓮華（これんげ）

花白しごふんに白緑を少かつくわりよし
ごふんにて花の形より引わけ法ごふんに
て細にとくべし白き蓮華のごとく仕立べし
葉緑青墨の汁にて細に入べし

鵁鶄（こいさぎ）　交鸕

目の内薄朱とぎみ目のふちより嘴つくへかけ
て白き細かりごふんにて○是嘴と足白緑
の上濃めり墨にて内くくり目のまわり朱のさめ
うにくべし頭墨くすみ毛出む墨にて○より
腹までの合まごごふんにて扇朱ぼかして扇
毛出わり横にく法合まじりごの扇わりごふん
けなき半入るべし背中かさなれより墨にて扇
尾の方ハ淡青にうすくぼかしべし毛の先に
墨わりごふん入る風切又尾墨の具に入り
くまくた絹よりごふんにて扇うすくくべし

二十六

苦薏（くいいさく）

是春菊也蒿蒿ノ野菊ニ非ス
又高麗菊ト云俗名也

花黄土の具にてくわり描よりごふんにて扇
法ごふんにて細に心白緑わりごふんにて
つきよ黄にうくくる菊のむれごとくし葉墨
にて小緑青仕立

鸕鳥（くいな）　水鶏ニ作ハ是ニ非ス

目の内合まじりごふにて下あご墨の具
嘴合黄土先より墨にて扇足肉色めり黄ん
どくる黄墨くまま朱ぼかしてよくけこき
朱ぼかして扇とも腹墨の具ふ背中墨
くまよ合まじりすくくる風切墨くま
先よりごふんにて扇尾をみくまま朱ぼかく
べし

二十七

菊（きく）

白紅黄はな咲分　白ハ下地白緑の具薄く
ぬりごふんにて隈どり紅ハ肉色朱仕立又丹にて
仕立黄ハ志やうの具又合まぜごふん艶
花の具多くめずして仕立花入咲分なと付べし
花の脇正花をも見合を付てよべし
茎小緑まで裏白緑並びにそろく花の
ちべごふんつききまうあひせ

雉子（きじ）　夏雉（なつきじ）全

雌ハ黒くろの具くり墨く肉色朱紙
わり多く仕立地緑青くま上に朱ずも
くべし脇羽れ角わき風切羽先ごふんく
まみの毛白緑茶の汁毛ハ府を入腹黒
の具をもみくまの尾ハ黒にて
雄ハ萌葱の具合まうご朱ずもみて府を入毛
は同尾まうご朱ずもみて仕立べし

二十八

蓮（はちす）　芙蓉（ふよう）　菡萏（かんたん）

紅白あり紅ハ多く肉の具多く成を胡粉多く
にて白ハ白緑の具うすくぬりて上ごふんく
まどりく胡粉にくぬり茶の汁にて
ふまけく肉上に小緑まくけ裏の葉白緑
茎まけくまけてく仕立べし蕊ハびゆ
ろく茎の汁にてつけ根茎うと黒乃上
合まうを朱ずもみてよべし

鷺（さぎ）

嘴足をもみて目のうちより黒つくへ
茎の汁にてく隈より汁の生まずぬりく
又其外嘴もあり時候によりて色あり
足ハより地身うとごふん一遍ぬりて上へごふん
く腹毛ハはごふんにて仕立べし
節ハ入二ぶん緑にて仕立

連子

二十九

水葵（みづあふひ）

花は桃色にて上ぐんじやうにてうすあゐずみくまとり
あさぎごふんにて隈とるべし葉は小緑青にてうら
くさ色にて筋はいづれも葉のけしきをよく見合せ粘る
かうれ合せてかくのごとくに染めてよし
つくべし

水札（けり）

背肉色にて黒のきりふにてくま取る足肉色
わり条のきめなりあまりくまどり黒ひまくろく
うすくぬりて合せてごふん墨にて毛書白く
見合て書入尻切墨にて仕立べし背中黄土
具なく墨くまどりやうをつけ墨ぐみにて毛
書とべし腹ごふんにてぼかし毛書つるのご
とくすべし

三十

白菖（あやめ）　菖 仝　蘭蓀 仝　白黒二色

花ははなより淡あさぎ細緑青二遍もかさね
まことにごふんにて隈とるべし中に白
あさぎ色にくま取を引ぬきおなじく白
緑葉のけしきより葉緑青筋は墨にて汁

鴛鴦（をし）　雄ヲ鴛ト云　雌ヲ鴦ト云

嘴朱肉色ふかく頭白く淡墨にて毛書
しろより腹まで墨の具淡くみく頭上へあさぎ
あいせ墨にて紙後まで合せごふんにて毛書
背中すこし具にて墨仕立風切尾まで見る
墨の具とみ仕立てはりぎぬは地合黄土
上へちやにてくま取りわかつ下段ご
ふんにて同毛かき入雌合せごふんにて朱
ぐるみ仕立腹まごの具合黄土くま書
ずみ毛書嘴は墨具とみ仕立足は雄のご
とく同のふちごふん引頭地身よりかし
墨淡仕立べし

三十一

萍蓬草（かうほね）　川骨 俗字

花はきわうの具まぜて合泥にても又は合黄土
茎葉とも緑青にて葉の汁にて筋くまとる
よし
小葉は入花付ともよし

鸊鷉（かいつぶり）　水鶏

嘴赤く先黒し肉色にて地肉色の朱くま
せよりすみにてくまとり目の廻り赤くぐるみ
ふちごふん足は紺より下茶汁墨より
上墨ずみの具にて仕上
地身墨入具わり墨く腹墨毛書なり

三十二

南京梅（なんきんむめ）

花はあいえすわうの具にてあさぎの具
あさぎにて筋はつがこすわうの具にてる
葉の汁

南京雉（なんきんきじ）

嘴ちうす墨の具目の廻り朱ぐるみ地身
白緑の具にとくわり葉は汁毛書まくよ
つまどりすくへべし同のまはりすゝ
腹のつれまつことあさぎの廻あさぎくも
かくさべし
風切墨の具よ　のくま尾ごふんにわり
ごふん毛書

三十三

三十四

昆季

梅ハ腥ッ南一京皿　巫峡

鷹ハ化テ南一京操リ　巨峡

[illegible]

来山

三十三

金盞花（きんせんくわ）

花ハ合黄土の具にて付立花の裾よりうらへ朱をくくべし葉ハ緑青にて付立葉の
汁節ハくさ
小黄の具入まのけにて

雛（ひよう）　雛ニ八より

目の円朱ずみ嘴ハ藤黄の具上ニ合黄
土にてくま取胴毛ハ朱にてぬり上ハ気作
くり蔭ハ白ごふん付立にて腹毛ハ三つ子の
ごとし
雌ハごふん付立朱ずみにて入府ハ嘴のごとく
手をハ付け生を写すこと専要なり
雛ハ皆頭より尾までみな腹上ニ朱黄を
うけ後ごふん毛出にし
黄にて付立る一流あり尾までうるてのち
写ハ同黄なり

三十四

南燭（なんてん）　南天竹

花ハごふん付立葉ハ緑青にてめり葉の汁
くま節ハ朱ずみ実ハ朱ずみ黒くくまとりて

鸜鵒（ひよどり）

嘴足ハ墨目の円朱ずみ也胸ハ白ごふんにて
墨付立毛つけよりせなかもハもとにわいろう
うすくあひせごふんにて出入毛ハ風切すそ
法にてれおとしかけ後ごふんうす墨尾羽
のおとし皆墨付立也

みかの青羽をあれ池の岸に
かもめのうれ身もいろ川かさん

乗 出

三十五

しやかう

花先ぶみ付立 差草の汁かけ 葉ニだん
緑まづ付立 草まれ汁そまうく肉をぼらうき
とくべし

刀鴨（たうべ） 鴫全 鴿全

嘴足ハ墨仕立 目の回り朱どみふちごふん
頭より背のうちまで墨くま上ニ毛のぼかし
うけ風切墨仕立 二重羽墨の上緑まで掛
胸ごふんむねより腹合黄土朱をうすくにじく
腹毛のうち細そうより尾まで墨くま上ニ
朱どみうすべし 地粋ごふんにてへたくべし

三十六

葡春羅（ぐんぴ） 鷹皮

花ハ地肉色 光明丹にて仕立あらいしそて
きらめいをみだし
葉緑まづ草の汁まうく肉節そうき
差白緑いづれも付立

千鳥（ちどり） 鴿

嘴足肉色 上朱にて立動し
頭より背中尾まで墨くま上ニ草の汁
うるさくのうへし風切墨にて地粋のかさき
胡粉汁腹ごふんく肉ごふんにてそ毛せ
とくべし

三十七

鳶尾(いちはつ)　紫羅傘

花ハわきだめり紺青にてつき描ごふんにて
うきい入中の筋に志やうの白をへべし
葉緑青に葉のけく薄筋也

鶻(くゐなり)　鶻

目の内朱ぐろみふちごふん嘴とうの具熟
身もえく薄上ちやどろみうけ下後ごふん
く薄筋也

三十八

鼠麹草(ちちこぐさ)　佛耳艸

花志やうの具付之葉緑青付之茎
の汁く薄筋之具後なし

鷗(かもめ)　江鷗

嘴足赤し肉色めり朱く薄目の内志やう
熟身うす墨く薄墨毛がきす又ごふん
毛がき出入
頬ひらい下後風切羽鑿ぶし出分白し
皆ごふん仕之法ごふんにて毛出し会
とくべし

鼠麹黄蒿開岸頭　春江漾々了閑鷗
不如人世浮沈変　随浪任風自在流

釋亮秀

三十九

金絲桃（びようやなぎ）

花黄にしてまつの実よりもちいさく ごふんにて先を
ぬり中の目を付る葉は二筋ほど金糸のごとく成
いとわりむ泥にて葉脈を書れけりて
うすく成るかくべし

鵲鵖鶺（ときまぐろしぎ）　田鳥　鴫 俗作

嘴黄色の実目ハ内朱ぐまひさいまきまり○
墨の上へ朱ぐまをうけむおくまでうすくりで
下段ごふん色也目脊中墨く成朱ずくりけ
而くあいろにそまかいをへべし足白緑の具
墨く成上に葉のけらくあ

四十

梅（ひめ）　棋　樅

白くも地白緑の具うすくぬりて上ごふんく成
ちべ表ハ金泥引ハ朱ぐまみ葉ハごふんなんりり
ちまきの具にて目を付るてあいづれも朱さまみ
本をとり墨く成の上へあいろをすくうくべし
大和ゑり仕立も地本の具ぬりて上墨をとりうすく
くまき本の具ハ白緑の具まお墨を入本のよ
りて冊のさかみ葉のけをかける

鸎（うぐひす）　鶯　黄鸝　倉庚　黄栗留　春鳥

嘴足墨にて目の内脊朱ぐまみかいらより脊
中うす墨く成上に葉のけをうくも風切とみ
く成腹ごふんくまをねるるねがいの下か志まを
乃さかひく成をとるべし

不知人世浮沈事　随波任風自在游
鳧鷖黄蘆開岸頭　春潮漲上閑鷗

韓亭 参

四十一

茶樹（ちやのき）　茗　檟　蔎　荈（巳上大名ニ）

花白く蕊は黄にてごふんにて仕立てきべごふんにてしべのきは藤黄の白を入其のきべは黄にて墨の汁にて付葉脈は臙脂をまぜて濃淡にて葉の汁にて仕立て濃くうす墨にてだんごふんうすくちりを〇とるべし

四十雀（しじふから）　[illegible]

嘴は墨にて頭は墨をもつて〇うす墨にて毛書をなし風切羽の黒きを以て仕立てこうごふんにて頬背中うすあさぎの具をかけてうす墨にて胸毛をかきろうにて又ごふんにて毛を入るべし又腹には黄土にうす墨にて胸上にうすくこれをろうしけそのまゝ上より毛書を画きごふんにて入るべし

四十二

福寿草（ふくじゆさう）

花黄にて花びらに紅藤黄の具を墨の汁にて筋を立て中より外へ細くとるべし葉は緑に紅を以て細く墨にてきまる二どんをうくべし葉の汁にて〇せん合

とらぞ鳥

嘴は墨にてうすく上に赤みをとる〇頭は墨にて風切羽は墨にてごふんにて仕立て尾羽は黒くきよし朱をうすく〇ねりの角にうすあさぎのきゝめをくまどへあいろうにて書くべし

四十三

瞿麦（なでしこ）　午麥　全

花は紫に藤黄の具付をなし葉の縁は墨付にて葉はうすあいにて葉二ぞん緑青付をなしくすみ墨付にて葉の汁にていづれも風情つよくならぬやうにとるべし

風鳥（ふうてう）

嘴は足共に墨にてむらより腹まではうす墨にて毛書をなし頭胸羽中胴は墨にて羽上に朱をとり尾羽は黒く墨にてうの具にて毛を立朱を入れてうすく画きて朱墨にてとるべし是をたしかにて用ひとしく云へども古人の論粗なり又南国の人まれなりといへども画ぬのこしを知るればなほ記しぬ

四十四

檀特（だんどく）

花は地色を藤黄にて上朱にてぼかし葉は墨の具付をなし葉の汁にて上に墨の線をとり葉緑青をかりて墨の汁にていづれも細く葉の汁にて

鵯（むく）

同の羽朱ずみにてごふん嘴足を墨にて頬を黄色くけ其上を朱にて羽上に朱ずみのけし尾羽は墨をとりしいて羽先は白しこのんにてうすべし羽風切羽は仕立二番羽朱ずみみとまずきんごふんを〇せん合こふんさわひへるべし

咲やこのなんこくせんハ来春ち垢

東正

今朝ハ鶯の出やハそあんまのま

七才
吉五郎

四十五
杏子（あんず） 一名 詌梅
花ハ地なしハ具ニ中ニなしくわかなしく
早ちべごふんにて出べし ちいさき具にて白ひを
実べし 墨朱どみ金粋うもと紅梅ニ似たり
併正ぶに ふも軟色ふも各判分るものあり
実付たるべし

鶴（しゐ）
常墨ニ而腹上ニ合黄出うけ足口し目はうち
うもとなしぶらごふんにてから脊中合黄
出毛出朱をみくさり四り墨の具うもとく嵐
色にて羽風切墨仕立ぶらごふんうけ二重
羽墨ニ腹の上ニなしうすくうけ墨ごふんに
てく腹より毛出ごふんなり

四十六
紫苑（しをん）
花白しごふん仕立ニ白緑茶の汁 仕立
葉緑まぶくく腹の細出いづれもくさ汁下墨
楠（スルテ）本下地合まくござりすなしくく腹なしより
くま細出なし之一流ニ合黄土の上ニ朱にて
仕立るわり法の紅茶のくまりきなし下仕立ニハ
出を

鵐（みそ） 又 伯趙
常足墨出頭よりまで朱どみ腹合まうど
背中墨れ具うもとくわり墨毛りくきもべし
風切墨仕立尾同く目の四朱ずと

四十七
柳（やなぎ） 楊
葉二ぐん緑青或ハ小緑付立白緑にて
出べきべし本墨うもとり上にうと茶の汁
くべし

三光（さんくわう）
常足墨毛頭よりむねまで濃墨にて出べし
背中墨く腹うもとくりて上ニせうなしぶを
うけ風切墨仕立尾濃墨にて出上ニ細こん
ぜうをくべし下腹内くごふんくまでふん毛
うさなり

四十八
萬世伊登宇（わうせいとう）
花ハ地わさびぬりなしぶく腹上ニこんぜううけ
相のむの仕立れぶくもべし花茶緑まくまりく
ま細くき茶の汁本朱どみかく分

きぬもみ
常足墨頭より背中までうもとわさびぬり
わいろにて毛りきく風切墨仕立二重羽うす
墨く腹尾わさびむ口より腹まで何しごふん
くまごふん毛りさ下腹尻まで合まうき朱
どみにて毛うれもべし

三十南之心的

凡て紅ん虎杖おゐそ沢乃皺

曼羨

四十九

紅梅（こうばい）

八重葉の真中ニ緑青にて筋を入べし
花ハ胡粉の具中より紅にて濃く一重ハ
紅にて内の花弁より胡粉にてうすく紅
合べし しべごふん先白ハ藤黄の具にて
付べし つぼミ紅の上光明朱にて上塗を薄く
ひくべし そて朱ずみにて実べし 木ハたうお
ふ墨く化を略く

鴇鵠（ときひばり）

嘴足ハ皮ニ赤し肉色上朱ずみにてき乾目
墨にて付かしら白ごふんくまを毛ごふんあり
惣身墨く墨仕立之腹ハ背中よりかすく
仕立べし

五十

虎杖（いたどり）

花ごふんにて付ゑ朱ずみにて実入べし
葉ハ紺合てうど朱の上すこしく波にく
け朱にて筋立べし

わぎせく

嘴足ハ合黄土朱ずみにて頭より背中墨
くま上ニ朱ずみにてけ毛立胸ハ○ゑ時朱ずみ
より下後ごふんくま同じく毛立腹より尾ま
で合黄土朱ずみにて府を入同毛立べし

上伊奈郡高遠町
池上藏書